

## 御館の乱について

—上杉景勝が勝利したその因果—

中川 佳奈

## はじめに

「御館の乱とは何だろう？」——この疑問に解を与える時、ほとんどの人は「上杉謙信の跡目を巡る上杉景勝と上杉景虎の相続争い」と云うだろう。定説とも云うべきこの見解は、多くの研究者が信じて疑わないところである。しかし、これは果たして、的を得た表現と云えるのだろうか。

御館の乱については、少なくとも研究者諸氏が一考を試みている。

御館の乱について、花ヶ前盛明氏は多くの著作の中で明確に「後継者争い」であると定義している。このようにはつきりと御館の乱を謙信の後継者争いとして定義している研究者は、花ヶ前氏のほかは田中圭一氏<sup>②</sup>、渡辺誠氏<sup>③</sup>など、決して少なくはない。

少数派の意見として、木村康裕氏<sup>④</sup>はそのあたりについては断言を避け、田中義成氏<sup>⑤</sup>の「謙信在世中確かに之を決定せざりしならん。さればこそ家中二分して相争うに至りしなり」と云う見解を引き合いに出している。小村式氏<sup>⑥</sup>は景勝が景虎を春日山城から追い出したその経緯から、御館の乱を「景勝の下剋上」としている。また井上鋭夫氏<sup>⑦</sup>は後継者に関するまともな遺言がなかったことから、「国内諸將は（中略）領国を二つに割って内乱に突入した」としている。

しかし、諸氏に共通して云えることは、不思議なまでに乱の勃発原因につ

いての説明を割愛している感があることである。しかも小田原北条<sup>⑧</sup>・武田など周辺大名が複雑に絡む乱の経過ばかりに目が行き、景勝の危機には概して関心が薄い。ともすると、読み手は景勝が一方的に景虎に攻撃を仕掛け、勝利したことが必然だったような錯覚すら覚えるのである。

これには多少の事情がある。と云うのも、当時の史料があまり残っていないために状況理解の大部分は後世の編纂物に委ねられていること、また周知のように謙信が確たる遺言もなしに急死し、家中がごたついたことである。このため、謙信死亡直後の双方の動きについては不明な点が多い。加えて「景勝と景虎が争い、景勝が勝利した」と云う結果が残っていることから、このような定説が存在するのであろう。

しかし、結果だけを鵜呑みにするのは大変躊躇されることであるし、種々の文献を追う限りでも、景勝にとつての御館の乱は決して楽な戦いではなかった。

謙信が急死すると、景勝はいち早く実城すなわち春日山城本丸に入り、諸將に自分が謙信の後継者である旨を示唆した。実城に入ったということとは、春日山に蓄えられていた莫大な金銀を手にし、越後国主となることを意味する。

景勝は、なぜこのような行動をとったのか。詳しくは後述するが、謙信という大きな存在を失った、上杉家中の混乱を避けるためだったと云われている。ところが、御館の乱はおよそ一年に亘って繰り広げられ、

多数の犠牲者を出した。完全収束に至っては、更に二年の歳月を要している。これは十分に内乱であり、信長に上杉征伐を決心させるきっかけともなっている。そうまでして、このタイミングで景虎と争うことは、不自然にすら思えるのである。

少なくとも、謙信死亡直後の段階で景勝が家督欲しさに景虎を敵に回すと云うことは、かなりのハイリスクであるし、これを機に景虎を葬ろうと云うのは、あまり賢いやり方とは云えない。実際、開戦当初の戦況は景勝にそれほど有利な状況であったとは思えないし、その上それまでの景勝と景虎の関係が目立った不和も見られない。現に景虎は、景勝が実城に入った後約二ヶ月間も、春日山に留まっている。景勝と景虎が真つ向対立していたのなら、景勝が実城に入った時点で、景虎は実城を攻めるなり、御館に逃げ込んでいてもおかしくはないだろう。また、景虎死亡後すぐに乱が収束しなかったことから見ても、これがただの家督争いではないことが窺える。

筆者が察するに御館の乱とは、景勝・景虎両者を奉じた越後国内の勢力争いではなからうか。一門の筆頭であった景勝は、謙信の死で揺れる家中を鎮めようと実城に入る。しかしその行動をきっかけとして、景勝が国主になることをよしとしない者に景虎は担がれ、敵対させられてしまったと云う可能性が考えられるのである。ましてや、景虎は関東の名門小田原北条氏の出自であり、戦となれば当然小田原北条氏、それと姻戚関係にある武田氏の後ろ盾も望める。景虎を担ぐ勢力にとっては、これ以上の好条件はない。

もちろん、これは既存の説に相反するところのあるものである。しかし前述のことを踏まえ、全く検討の余地がないかと云えば、それは「ノー」であると思われる。些かではあるが、筆者の拙論にお付き合い頂きたい。

## 第一章 乱勃発までの経緯

### 第一節 景勝と景虎

はじめに、上杉景勝と上杉景虎と云う二人は、どのような人物であったのだろうか。ここでは、その生い立ちについて触れておく。

景勝は弘治元(一五五五)年十一月二十七日、坂戸城主長尾政景の次男として誕生した。幼名は卯松、後に喜平次頭景と称した。母は謙信の姉である仙桃院。姉と妹が一人ずついて、彼女たちは一人は景虎に嫁し、もう一人は同じく謙信の養子となった上条義春に嫁している。普通は姉が義春室、妹が景虎室とされているが、それと真逆の説もあり、はつきりしていない。また、兄義景は十歳と云う幼さで早世している。つまり、彼は甥の立場から謙信の養子に入ったのである。

問題は彼がいつ養子に入ったかだが、筆者が調べたところ、これには大きく二つの説がある。

まず、渡辺誠氏、木村康裕氏の説。渡辺氏は『景勝公御年譜』の記述に従い、永禄二(一五五九)年に、木村氏は『上杉家年譜』の記述をもとにして少なくとも同七(一五六四)年以前、ともすると同二年には謙信の側にいたとしている。両氏の違いは、渡辺氏が「養子として」謙信の側にいたと云う点に対し、木村氏は「養子ではなく人質であった」と主張している点である。これら意見の食い違いは、根拠とする史料が後世に編纂されたものであることと、また景勝の実父長尾政景と謙信の關係に原因があると思われる。

二つめは、花ヶ前盛明氏、田中圭一氏などの説である。氏らは景勝が養子入りしたのは政景の死後としている。未亡人となった母の仙桃院に

伴われて、姉や妹とともに春日山へ身を寄せた後、謙信の養子となったと云うのである。

この二つの意見を大きく分けるポイントは、前出の『景勝公御年譜』『上杉家年譜』に記載されている、永禄五(一五六二)年のエピソードをどう解釈するかにある。そのエピソードとは、「関東計略の最中、謙信はその陣中から景勝の書の上達を褒め、自らの書いた習字の手本を送った」と云うものである。これを根拠に、渡辺・木村両氏は少なくとも永禄五年には景勝が謙信の養子となっていたとする。

しかしこの書状から景勝が謙信の養子となっていたと断定するのは、いささか早合点の感があるのは否めない。

以上のことを踏まえ、筆者は景勝が謙信に養子入りしたのは政景死後ではないかと考える。その根拠は二つあり、ひとつは政景が謙信に降伏したのが天文二十(一五五一)年八月であり、その後目立った不和もなかったため、弘治元(一五五五)年生まれの景勝が人質となりえたとは考えにくいこと。そしてもうひとつが謙信は永禄二年に四月三日から十月二十八日まで、二回目の上洛を果たしているため、景勝を養子として迎えるきっかけや余裕があったかどうか、甚だ疑問なことである。そして政景の死後、坂戸城は政景家中の栗林政頼ら上田衆が支配した。このことから、当時わずか十歳だった景勝は城を追われてしまったのではと云う見方もできないが、謙信が景勝に手本を送ったという逸話も含めて、むしろ筆者は謙信がそれだけ景勝を可愛がっていたのだと考えている。自分の子のように思っていたからこそ、父を失った景勝を不憫に思い、引き取って養子にまでしたのだろう。

とにかく、景勝は謙信の養子となった。そして天正三(一五七五)年正月、謙信より弾正少弼の官途を譲られ、景勝と名を改め、一門筆頭の

地位に就くのである。

一方景虎は天文二十三(一五五四)年に北条氏康の七男として誕生した。末子ということもあり、幼少のころより箱根湯本の早雲寺住職である明叟和尚に託され、西堂と名乗り、成人した暁には出家するよう定められていた。

『関八州古戦録』などによれば、甲・駿・相同盟が成立した際、甲斐の武田家に送り込まれ、三郎氏秀と名乗り、それが破れてからは生家に戻されたとあるが、今日ではこれは景虎ではなく別人であったと云う説が有力のようである。しかしこれが同一人物であったとしたら、景虎は歌まで歌われるほどの「坂東にかくれなき」美男子だったことになる。

とにかく、彼は元亀元(一五七〇)年四月、越・相同盟の人質として越後にやってくる。謙信は彼を養子にして自分の初名「景虎」を与え、景勝の妹を嫁して春日山城二の郭に住ませた。このことを聞いた氏康は「御城中において御祝儀をとげらるるの由、誠に千秋万歳の至、愚老において本望満足これに過ぎず候、近日使者を以て御祝儀申し述べべく候」(『上杉家文書』)と、謙信の待遇に大変喜び、礼状を送っている。

## 第二節 後継者は誰だ？

さて、前述のように謙信は急死してしまったため、後継者についての明確な遺言は残してはいない。ここでは、謙信がどのように考えていたのか、さまざまな説を比較検討してみたいと思う。

謙信は生涯独身を通したので当然のことながら実子はなく、その代わりに三人の養子が存在した。上杉景勝、上杉景虎、そして上条義春であ

る。

このうち上条義春は能登守護畠山義統の次子で、元龜二(一五七二)年、彼が十九歳の時に謙信の命で上杉一門上条家を相続した。このため、謙信の後継者候補からは外されていたと見られている。

謙信の後継者について、江戸時代の諸書は次のように主張する。

- ・景勝後継者説(『上杉家年譜』)
- ・景虎後継者説(『北条五代記』)
- ・後継者二人説(『北条記』『管窺武鑑』)
- ・後継者不明説(『関八州古戦録』)

当然だがこれらはいずれも後世に編纂された史料であり、内容が史実に沿うかどうか、確証がない。少なくとも、一門筆頭の地位を与えられていたことから、景勝が後継者として有力視されてきたのは間違いないだろう。ただ市村高男氏<sup>⑩</sup>は、小田原北条側は景虎が謙信の家督と合わせて関東管領職をも相続するであろうと見越していたと指摘する。確かに『北条五代記』などには、その旨が記載されている。越・相同盟成立の際にそのような約定があったかどうかは解らないが、人質として送られた景虎をわざわざ養子にし、さらに謙信の姪を嫁がせたと云うことから、小田原北条側は多少なりとも期待していたのだろう。

花ヶ前盛明氏などは、謙信の景虎に対する待遇から、謙信は関東管領職を景虎に継がせるつもりだったのであると推測している。

この点を踏まえて、井上鋭夫氏は越後国主の座を景勝に、関東管領のポストと上杉憲政所領分を景虎に譲ろうと考えていたとする。また山崎哲彦氏<sup>⑪</sup>は、越後の文治・内政面を景虎、軍事・外交面を景勝に司らせ

ようと考えていたとしている。両氏の考えは、内容こそ違えど、後継者二人説を推すものと考えてよいだろう。

これに対し池田嘉一氏<sup>⑫</sup>は、景虎支持者が多かったことや景虎に軍役が課されていなかったことなどから、景虎後継者説を推す。

結局のところ、いずれの説も確たる証拠がないため推論の域を出ないが、筆者としては、次のように考えている。

謙信は、前述の理由から景勝には越後国、ひいては越中、能登、加賀までの北陸所領を譲り京都に目を向けさせ、上洛をさせようとしたのではないだろうか。逆に景虎には関東管領職と上杉憲政旧領分を譲り、関東へ目を向けさせようとした。謙信自身、その生涯において北陸・信濃・関東の三方向において戦闘を展開し、非常に苦しい思いをしている。このことから、後継者を複数設定して役割を分けることで、より強固な領国支配体制を構築しようとしたのではないだろうか。

また小田原北条氏出身の景虎に管領職を譲り関東を支配させることで、小田原北条氏との関係をより良好なものに保ち、景勝上洛の際に関東における不安を解消するという配慮もあつたと思われる。そのために、景勝の妹をわざわざ嫁がせ<sup>⑬</sup>、景勝と景虎の仲を良好に保つ努力を行ったのである。関東管領職の方が弾正少弼よりも官位が上のため、景虎を景勝の臣下にするとうことはできないだろうが、景勝を中心として景虎にそのサポート役を任せる、と云う後継者構図が一番妥当なのではないかと思う。

ただ、景虎に対する処遇と御館の乱勃発直後に景虎方についた諸将が謙信とより深い関係にある者達であることを考えると、表向きは景虎を後継者として扱っていた可能性はある。

そう考えると、義春を養子として迎えたにも関わらず上条家を相続さ

せてしまったのにも納得がゆく。景虎が養子として越後に迎えられたのが元亀元年、義春はその翌年に上条家を相続している。謙信ははじめから義春に景勝のサポート役を任せようとして養子に迎えたが、越・相同盟が成り景虎が越後にやってきた。そのため謙信は関東支配を任せるにおいて、どちらが適任であろうかと考え、景虎に関東を任せることに決めた。そして後々の争いを避けるために義春に上条家を継がせたのだから。

この推測が中っているとすれば、謙信は生前より景勝に跡目を任せるための準備をしていたことになる。しかしあまりにも突然な病は、彼にその準備を全うさせる暇を与えなかった。彼の死後、御館の乱が起こってしまったことは、彼にとつては無念であつたらう。

### 第三節 謙信の死とその直後の動き

天正六(一五七八)年三月九日、謙信は病に倒れた。脳卒中であつたといわれる。手当ての甲斐もなく、四日後の十三日、鬼籍の人となる。

諸書の中には、謙信の葬儀が済むとすぐ、景勝は謙信の遺言と称して実城、金蔵、兵器蔵を占領したと伝えるものが多くある。しかし木村康裕氏は『上杉家御年譜』『北越軍記』の記述を基にして、謙信の遺言と諸將の評議の結果、景勝は遅くとも三月二十四日には実城入りしていたと主張する。どのような顔ぶれで何を評議したかは定かではないが、謙信の卒倒は誰に予想できたものでもなかった。また謙信の葬儀、法要などの手間や、諸將宛の書状の日付が三月二十四日以降であることなどを考えれば、二十四日前後となるのも仕方ないだろう。

さて、実城入りした景勝は、その旨を伝える書状を諸將に宛てて送っている。これらの書状は内容が同一であることから、一斉に送られた可能性が高い。つまり自分が謙信の後継者たる表明を内外に向けてしたことになる。次いで景勝は、上野国厩橋城主北条高広・景広父子に命じて、関東の情勢を報告させている。これは明らかに小田原の北条氏を警戒した動きであり、景勝の意識が何処にあつたかを物語るものである。この時点では、景勝は国内ではなく国外の大名の「乗っ取り」を最も警戒していた、と云えるだろう。

ところで、景勝が一応にも越後国主として名乗りを上げたこととは、景勝の出身地である越後魚沼・上田衆の勢力が強化されたことをも意味する。彼らは景勝の直臣団を形成しており、景勝が当主になってしまえばほぼ確実に政権中枢へ入り込んでいく。そうなると、面白くないのは初期から謙信政権を支えてきた栃尾・三条・栖吉・古志などの諸將だ。実際、彼らは景虎を支援している。

また北条高広など上野の諸將も、当初は景勝方だったものの、小田原北条氏が関与してくるようになると景虎方に寝返っている。『上杉家御年譜』によれば、景虎は北条氏康の末子であり、武田勝頼は智なので、北条・武田の後ろ盾を期待して景虎に志を通じる者が多かったとある。山田邦明氏<sup>1)</sup>は、景虎が勝利すれば上杉と小田原北条が連携して上野に平和が訪れると踏んだためだと指摘している。山田氏の指摘は、上野諸將の性格を鋭く抉っているようで面白い。

逆に阿賀野川以北の下郡とか揚(阿賀)北と呼ばれる地域の、揚北衆と呼ばれる土着性の強い諸將の多くは、景虎方についている。これについては、また後述する。

また前出の木村氏は、御館の乱を「謙信政権の中古参者と新参者の

対立」という構図でもあることを指摘している。

ここで問題になってくるのは、景勝方と景虎方のどちらが先に攻撃を仕掛けたか、と云うことである。『小田原北条記』には、景勝は本丸から景虎の家老山中兵部を追い出し、景虎の居た二の丸に鉄砲を打ち込んだとある。また、井上鋭夫氏は、景虎は景勝に面会を求めたが、上田衆に鉄砲で追い返されたので、御館に身を寄せたのだ、と説明している。しかし、これらは両方とも詳しい日付が明らかではない。『上杉家文書』に景虎方の本庄秀綱が景勝方の直江信綱の居城である与板城を攻めたことが、四月末より五月頭の事件として掲載されているため、小規模な小競り合いは各地で見られていたのではないかと推測することができる。

少なくとも景勝が実城入りしたことで、越後国内の各地で旧勢力を中心とした反景勝派が景虎を奉じて反旗を翻し始めた。景勝方は春日山城内から景虎を「取除」くために攻撃を加えていたが、五月五日、春日山と御館の中間地点である大場で初めて衝突することになる。確たる文献が少ないため確かなことは云えないが、景虎派は予め御館すなわち上杉憲政を懐柔していた可能性がある。前管領であった憲政の権威を利用したものと思われるが、そうでなければ、なぜ衝突場所が春日山と御館の中間地点だったのか。これは、既に御館に反景勝派が集まり始めていた証拠とは云えないだろうか。

とにかく景虎は反景勝派の頭目とみなされ、五月十三日の夜、妻子を伴い御館へ逃げ延びたのである。

## 第二章 景勝の転機

### 第一節 追い詰められていく景勝

前述のとおり戦いの火蓋は切つて落とされた。景虎が御館入りすると、鯨ヶ尾城主堀江宗親・飯山城主桃井義孝らが御館に入り、景虎方の守備体制が着々と構築されてきた。当初、景虎方は春日山を包囲するかたちで城を確保し、景勝方の魚沼・揚北への連絡路を絶っている。

五月十六日、景虎方の東条佐渡守が春日山城下に放火し、三千軒を焼き払っている。翌日、景虎方は春日山城を攻め、「千貫門」と呼ばれる北の要の門まで侵入しているが撃退されている。なお、両軍の衝突は春日山城の北側の荒川館・愛宕でも見られる。

六月に入ると、景勝は景虎方の城の取り崩しにばかり、魚沼・揚北への連絡路を回復、積極的に御館を攻め、巢城のみとしている。ここで注意しておくが、そもそも御館は上杉憲政の居館として、また謙信政権の政庁として日常的に使用されていた「館」であったため、要塞としての機能も物資も十分でなかったと思われる。よって、御館がこの段階で巢城のみとなったということは、春日山城その他の城砦がそのみになったこととは全く意味が違う。

さて、景勝の出身地である魚沼を含んだ中郡は、上野・信濃と境を接している。そのため、この地域の景勝方の諸将は北条高広・景広父子、河野重親を中心とした上野の諸将を防ぎつつ、信濃方面から侵入してくる在信濃の景虎方の兵を防ぎ、なおかつ侵入が予想される武田氏にも警戒せねばならないと云う苦しい立場におかれていた。

また、揚北では大規模な戦闘はなかったが、景虎方の諸将と連携して

伊達氏や蘆名氏が越後に侵入するという事件が起こっている。木村氏は彼らが謙信の死と云う混乱に乗じて個々で越後に侵入した可能性を残しつつも、当時佐竹氏征伐で小田原北条氏と連携していたため、氏政が応援を要請したのではないかとしている。どちらにしろ、伊達・蘆名氏は景虎や上野の諸將と緊密に連絡し、それは景勝にとっては大きな脅威であつたに違いない。

越中・能登にも小島職鎮など景勝を支援する諸將は多くいたが、彼らは越中に侵攻してきた織田勢の防戦に忙しく、越後に着陣するのは天正七年年始から二月にかけてとなる。この織田信長の動きについて、『上杉家文書』には佐々権左衛門長種<sup>⑤</sup>が信長の命で河田長親を懐柔する書状が四月晦日付で収録されていることから、信長はかなり早い段階から上杉方に手入れをしていたことになる。

こうして、景勝はじわじわと追い詰められていった。揚北は伊達・蘆名、魚沼を含む中郡は武田・上野勢、そして戦いの中心となっていた頸城は景虎本隊。これらはみな景虎とその実家の小田原北条氏と連携し、景勝を締めあげていった。景勝がただの館である御館を陥落させられなかつたことを見ても、相当苦戦していたと云つてよいだろう。

景勝の頼みは春日山に眠る莫大な謙信の遺産であつた。

## 第二節 景勝・勝頼同盟の意義と成果

さて、氏政と同盟関係にあつた勝頼は氏政の要請を受け、景虎救援の兵を起こした。五月下旬には武田信豊が先発隊として信越国境に迫っている。その大軍の数は、実に総勢二万だつたと云われている。

景勝は勝頼を敵に回すことの不利を悟り、勝頼懐柔作戦に乗り出す。花ヶ前盛明氏によれば、東上野半国と黄金一万両を勝頼に贈つて、六月七日に和睦しているとするが、残念ながら、この景勝・勝頼の和議の条件をまとめた史料がない。諸書によつては、上野が半国だつたり丸々一国だつたり、勝頼やその家臣に送るとしている金銭の額面が違つていたり、景勝と勝頼の妹との婚約や、景勝が勝頼の支配下に入ることを条件とするものもあり、まちまちである。

とにかく、この講和は勝頼に一方的に有利なものであつたことは間違いないだろう。

また、勝頼がこの和睦に乗つた理由についても諸説ある。『小田原北条記』はただ「大欲にふけつた」としているが、児玉彰三郎氏<sup>⑥</sup>の「氏政が武田・上杉を争わせて両者の力をそぎ、折を見て信越両国を奪おうとしていたのではないか」と云う勝頼の疑いに対する指摘や、須藤茂樹氏<sup>⑦</sup>の「織田・徳川連合軍に対抗するため、甲越相の三国同盟の成立を目論んでいたのではないか」と云う説がある。『新潟県史』には、「越後が景虎領になると、関・越という広範囲に包囲される可能性を勝頼が恐れたから」という見解もある。筆者としては、『新潟県史』と須藤氏の説を合わせたものが最もしっくりくるような気がする。現に勝頼は景勝と和睦後、すぐに景勝・景虎の和睦調停に入っている。景勝に与して景虎を殺してしまつては、小田原北条を含めた三国同盟は成り得ないと考えたからだろう。それに加えて勝頼は天正三(一五七五)年にかの有名な長篠・設楽ヶ原の戦いで大敗を喫しており、東美濃の所領を失っている。勝頼によつて勢力圏を拡大させ国力を少しでも向上させる選択へ流れることは、織田・家康連合軍と境を接する立場の大名として少しも不可思議なことではない。

『上杉家文書』によれば、六月十二日に景勝から勝頼に、二十九日に勝頼・信豊から景勝にそれぞれ誓詞が送られている。その文書から、仲介に当たったのが武田側では武田信豊ら、景勝側では揚北の板屋修理亮らだったことも解っている。

こうして景勝は武田の脅威を回避した。それによって得られたものはかなり大きかったと思われる。まず信越国境の危機がなくなり、そのため警備に当たっていた妻有の小森沢政秀らに、緊迫した状態の続く上田勢の助勢が可能になった。次に、勝頼の調停で景勝・景虎の和議が成立する。これはすぐに破談となり、勝頼は一旦甲斐へ戻るものの、九月下旬に再び信濃經由で越後に入り、妻有に布陣して上田を窺った。これは景虎方にとっては大きな牽制である。その甲斐があつたのか、小田原北条勢は九月末〜十月頭にかけて、樺沢城と御館に詰めた兵のみを残して、積雪を理由に小田原へ引き揚げた。

景勝にとっては雪解けまでに乱を収束させること、景虎にとっては雪解けまでいかに持ち堪えるかが問題となった。

### 第三章 御館の乱、収束へ

#### 第一節 景虎自害の決定打

御館の乱が収束せぬまま、越後は冬を迎えた。小田原北条勢が撤退した後、景勝が琵琶島城の攻略に乗り出したほかは、景虎は魚沼を中心とした味方の諸將に警備をかためよう命じるばかりで、各地で睨み合いが続いていた。

しかし、年が明けると状況は一変する。織田勢に手間取っていた越中の河田長親が参陣し、二月に入ると景勝は御館を激しく攻撃し、北条景広を討ち取っている。それを受けてか、中郡の樺沢城では景勝方に寝返る者が多く出、あえなく落城した。景勝は同月二十六日に、坂戸城将深沢利重らに御館攻撃へ参陣するよう命じているから、樺沢城の落城をもって魚沼地方の抗争は一応収束したと云つてもよいだろう。

木村氏の論文によれば、二月五日、景虎は河田吉久に一刻も早く援軍を送るように要請し、十一日には本庄繁長に「十日被相延時者、滅亡迄二候」と訴えている。この頃は御館周辺でも、鯨波小屋・上条城などの景虎方の砦や城が攻略された。

二月十七日、猿毛城主上野九兵衛尉は景虎方の立て籠る島の壘を攻略し、翌日、景勝は上野九兵衛尉を応化橋へ出陣させ、錦要害から御館へ通じる輸送路を遮断させた。糧道を絶たれた御館は完全に孤立することになる。あまつさえ三月三日、旗持城主佐野清左衛門尉は、琵琶島城主前島修理亮が御館に水路で輸送しようとしていた食糧を奪っている。

同月十七日、御館は景勝軍の猛攻を受け、落城した。

御館に居た上杉憲政は、景虎の子道満丸を伴い和議のため春日山へ向かう途中、春日山城下の四ツ屋砦で景勝方の兵に捕らえられ惨殺されたとも、御館落城の際に自害したとも伝えられている。

さて、肝心の景虎であるが、彼の死についても諸説がある。『小田原北条記』によると、養祖父憲政とともに「三月十八日に自害して、御館に火をかけた」とされている。しかし木村氏は、景虎は憲政が惨殺されたのを知り、落城前に御館を脱して小田原に向かう途中、景勝方の追撃に遭い、鮫ヶ尾城に籠ったが二十四日に自刃したと云う。井上氏は木村氏の見解と似てはいるものの、小田原へ逃げる際立ち寄った鮫ヶ尾城で



城主堀江宗親の謀反に遭い、自刃したとする。

花ヶ前氏によれば、昭和三十九(一九六四)年の御館跡発掘調査の際、たくさん出土品の中から鼈甲の櫛と簪が発見された。氏はこれを「戦火に消えた景虎の妻女たちの所持品であつたらう」と説明している。景虎も同じ火に焼かれたのだろうか。

とにかく、景虎の死をもって御館の攻防は終焉を迎える。しかし、各地にはまだ反景勝分子が存在していた。

## 第二節 景勝の戦後処理

景虎が死してなお、中郡を中心として景虎方の武将が抵抗していた。尚且つ雪解けを迎えて、上越国境からは小田原北条軍が再び侵入してくる可能性もあるため、景勝は坂戸城将らに上越国境警備について命じている。実際、天正八年閏三月に小田原北条勢が上信越国境付近の荒戸城を攻撃しているが、大事には至らず、付近の残党も一掃されたらしい。木村氏によると、揚北では天正七年四月、黒川清実が占拠されていた鳥坂城を奪い返した。その年の六月、清実が伊達輝宗の赦免依頼によって景勝から赦されているし、すでに二月頃には蘆名氏が景勝に修好を求めているので、伊達・蘆名両氏の侵入の危機も既に去っていたものと思われる。

また『上杉家文書』によれば、景勝は勝頼から七月三日に甲州名物の鷹一羽、十九日に夏酒を越後静謐の祝いの品として贈られているので、この頃の戦況は小康状態にあつたのだろう。

最後まで頑強に抵抗を続けていたのが、中郡の古志・蒲原地方である。

特に栃尾の本庄秀綱、三条の神余親綱が中心となっていた。対する景勝方の武将が援軍を要請していたが、景勝も兵を消耗しており、すぐに援軍を出すことはできなかった。

結局景勝が中郡へ兵を進めたのは、天正八年の雪解け後であつた。四月、景勝は地蔵堂へ布陣し、抵抗する蔵王堂・大面・栃尾を攻撃した。二十二日、栃尾城は景勝方の攻撃により落城し、城主本庄秀綱は会津へ落ち延びたと伝えられている。また、この時蔵王堂・大面も景勝方の手に落ちている。

栃尾征伐より帰還した景勝に神余親綱は停戦を申し出たが、景勝は無視し、三条討伐の準備をはじめた。六月十二日、景勝は山吉景長に「廻調略三条之儀、可為持者也」と命じている。同月二十日付の景勝書状に「三条落居之儀」とあるので、十二日から二十日までの間に三条城は落城したと思われる。

ところで、三条城主神余親綱は城内にいた山吉氏の旧臣に殺害されたらしい。十二日付の命令と併せて考えると、山吉景長を使って山吉氏旧臣を内応させた可能性がかなり高いと云えるだろう。

同月二十二日に再び中郡に出馬した景勝は、栃尾・三条両城の仕置きを行い、七月下旬に春日山に帰城した。余談となるが、景勝と勝頼は同盟後、武田氏が滅亡する直前まで、親しく連絡を取り合っていたようである。この時の景勝宛の勝頼の書状には「近日者其表之様子如何候哉、仍栃尾、三条領地之御仕置、成就候哉、此上何方へも直ニ可被動干戈歟、又可為御帰陣歟」とあり、景勝のことを心配している様子が窺える。また八月六日にも、勝頼は「其国無残所御静謐」を祝って太刀一腰と鹿毛の馬を一頭、景勝に贈っている。

こうして、謙信の死後約三年に亘る動乱はようやく収束し、景勝は後

継者としての地位を固めたのである。

## おわりに

本論とは少し関係のない話になるが、景勝が乱後、御館の乱以上の窮地に陥ったことはあまり知られていない。丁度その頃は、秀吉が中国征伐に明け暮れている頃であり、我々の目はどうもそちらの方に向いてしまいがちのようだ。その後の景勝を知る手がかりと云う意味でも、少しそのことについて触れておきたい。

謙信が急死すると、信長は越中への侵攻をすすめ、越後諸將の懐柔に乗り出した。前述のように、信長は佐々権左衛門を通じて魚津城将河田長親を本国近江の地を与える約束で味方に誘ったが、長親は応じなかった。

ところが、天正九（一五八二）年四月、長親は急死する。これを機に、織田軍の越中攻略に拍車がかかることになる。

加えて、御館の乱の論功行賞に不満を持っていた新発田重家が信長の誘いに乗り内通してしまった。

天正十年一月十日、重家は信長の支援を受け、新潟と沼垂を占領した。そのため景勝方の諸將は新潟・新発田・水原などで新発田軍と戦った。三月十一日、信長は天目山の戦いで勝頼を討つと、越前に柴田勝家を、加賀に佐久間盛政を、能登に前田利家を配置し、新発田重家と連携して上杉景勝包囲作戦を展開した。

景勝方の小島職鎮が織田方の富山城を攻略すると、柴田勝家、前田利家、佐々成政らの織田軍万余は三月十一日、富山城を奪還し、上杉軍

三八〇〇余の立て籠もる魚津城を包囲した。

この報を受けた景勝は、能登の諸將、および上条政繁、斉藤朝信らを先発隊として魚津城へ送った。籠城すること四十日、四月二十三日に魚津城に立て籠もる諸將は連署し、直江兼統に討死の覚悟を告げ、景勝に伝えるように頼んでいる。さすがの景勝もこれには堪えたのか、五月になると常陸の佐竹義重に宛てて遺書めいた書状を送っている。

五月十五日、景勝が魚津城救援のため天神山城へ出陣すると、柴田勝家、佐々成政、前田利家らの織田軍が天神山城へ向かい、激戦を展開した。すると景勝留守の春日山を狙って、森長可が海津城を拠点に兵五千を率いて越後へ侵入し、春日山の目と鼻の位置にまで押し寄せた。滝川一益も間厩橋城を拠点に三国峠から越後に侵攻し、春日山に迫った。越後国内は越後国内で、新発田重家とその居城である新発田城を拠点に戦線を拡大していた。

春日山危機の急報を受けた景勝は、魚津城救援の望みを捨て、春日山へ引き揚げた。

魚津城は織田軍に包囲されること八十余日、救援も食糧もなく、六月三日、落城した。

ここに景勝は四面楚歌、窮地に陥った。まさしく御館の乱以上の一大危機である。勝ちに乗じた織田軍は越後攻略を果たすべく、その準備に取り掛かった。

ところが六月二日、信長が京都本能寺で明智光秀に討たれると、状況は一変した。「信長自刃」の急報が四日、魚津城に齎されると、驚いた織田軍は一目散に全軍撤退し、景勝は一夜にして窮地を脱したのだ。その後の景勝の歩みは良く知られるところである。会津・米沢と移封され、上杉米沢藩の礎を築いた。

さて、こうして本稿を書き進めてきたが、御館の乱とは何だったのだろうか。

景勝が勝利したその因果——これが、本稿のサブタイトルであった。もう一度、スタートラインに戻ってみよう。どうして景勝は御館の乱に勝利することができたのだろうか。

筆者が結論づけるに、景勝が勝利できた原因はいくつかある。

まず一つは、実城に眠る莫大な謙信の遺産を手に入れたこと。小田原北条氏がバックとして控え、支持者も多かった景虎と違い、景勝はこの潤沢な軍資金がなければ、あれほど戦えなかつたろう。何より、景勝・勝頼同盟の実態は「勝頼を買収した」といつても良いほどである。

二つ目に、春日山く御館周辺、つまり頸城の通路を確保したこと。頸城は、越中・信濃に境を接し、越後最大の港・直江津もある。さらに越後国内の各地域へと通ずる連絡路が集中している。そのど真ん中にあるのが春日山であり、御館なのだ。春日山と御館と云う、直線距離にしてほんの数キロしか離れていない二つの建物の間で抗争が発生したのは、こう云った理由があつたからなのだ。

三つ目は、御館が軍事施設としての性格を持ち合わせていなかったこと。前述したが御館は頸城平野に建つ居館であり政庁であつた。軍事上の防御力など皆無に等しいし、そこに蓄えられていたものなどたかが知れている。私は、御館と云う最弱の要塞で一年も交戦できたこと自体が評価に値することだと思つている。早い段階でより堅固な城砦に拠点を變えていたら、御館の乱はもつと長期化していただろうし、景勝の勝利は云うまでもなく、ともすると織田軍の介入によつて上杉家そのものが滅亡していた可能性も考えられなくはない。

そして最後に、和議を通じて武田勝頼に気に入つてもらえたこと。小

田原北条勢をはじめとする国外の勢力に苦しむ景勝にとつて、勝頼に何かと有利に動いてもらえたことは幸運だつた。ちなみに、景勝は天正六年十二月に勝頼のすすめで勝頼の妹・菊姫と婚約し、翌七年十月、結婚している。

以上の事柄が景勝にプラスに作用し、御館の乱と云う中世から近世への動乱期を勝ち抜くことができたのであろう。しかし再三主張するように、それは決して安易なことではなかつた。初めから景勝が勝つようにことが成つたわけではなく、そのように必死になつて戦つた結果、掴んだ勝利なのであつた。今となつては結果しか残されてはいないが、景勝と景虎はそれぞれ自分の転機に臨んで、どのような心持ちでいたのだろうか。今となつては、それを知る手立てはない。

〔付記〕本稿は別府大学文学部史学科に提出した平成十七年度卒業論文〔同題目〕をもとに、加筆・訂正したものである。卒論作成にあつては、卒論演習において指導していただいた白峰旬先生に深謝する次第である。

#### 註

- (1) 花ヶ前盛明『上杉景勝のすべて』新人物往来社 一九九五年、『直江兼続のすべて』新人物往来社 一九九三年、『中世越後の歴史』新人物往来社 一九八六年、『上杉謙信と春日山城』新人物往来社 一九八四年、花ヶ前盛明編『新潟県の不思議事典』新人物往来社 一九九八年。

- (2) 田中圭一『新潟県の歴史』山川出版社 一九九八年。
- (3) 渡辺誠「上杉景勝の戦国サバイバル戦術」(『歴史群像シリーズ』⑧ 上杉謙信) 学習研究社 一九八八年。
- (4) 木村康裕「景虎・景勝と御館の乱」(『定本上杉謙信』高志書院 二〇〇〇年)。
- (5) 田中義成『織田時代史』明治書院 一九二四年。
- (6) 小村式(責任編)『図説 新潟県の歴史』河出書房出版 一九九八年。
- (7) 井上鋭夫『新潟県の歴史』山川出版社 一九七〇年。
- (8) 本稿では、いわゆる後北条氏のことをただ単に「北条氏」ではなく、「小田原北条氏」と表記する。これは北条高広きたじょうなどの北条氏と後北条氏を混同しないようにするためである。
- (9) 長尾政景という人は、謙信がその兄晴景と越後の守護代の座を争った際晴景側につき、謙信がそれに勝利した後も彼に背いた人物であり、武勇智謀の将と名高い。結局は政景の妻となっていた謙信の姉に免じて許され、彼の軍門に降った。その後は謙信の右腕として活躍し、かの有名な謙信出奔事件の解決にも尽力している。しかし永禄七年七月五日、彼は突然の死を遂げる。舟遊びの最中、溺死してしまつたのである。これについて花ヶ前盛明氏はその編著書『上杉景勝のすべて』の中で次のように述べている。

政景が琵琶島城主宇佐美定満を招き、野尻湖で舟を浮べて遊宴を催した。酒に酔い、興にのつた二人は池に飛び込み、遊泳をはじめた。池の水は思ったより冷たく、酔いも手強い。心臓マヒでも起こしたのであろうか、二人とも溺死してしまつた。(中略)

『国分威胤見聞録』には、溺死した政景の肩の下に刀で斬られ

た傷あとがあつたと書かれている。この書物は同船した国分彦五郎という者の母が、その現場にかけつけて政景の死体を見ているので、信頼できそうである。いずれにしろ、事件の真相は、迷宮入りしてしまつた。謙信は、いぜんとして心服しない政景を定満に命じて殺害させたのかもしれない。

以上のことから、この事件をどう捉えるかが幼少時の景勝の立場を考える重要なカギになってくるのではないだろうか。この事件をたゞの事故として取り扱うなら、謙信と政景の関係は普通ないし良好であつたと考えられ、実子のない謙信に景勝を早くから養子入りさせたのも納得がいかないわけではない。このように政景が誤つて溺死したと云う説は『上杉謙信伝』によるもので、渡辺慶一氏はこれを正しいとしているが、この史料もやはり後世に編纂されたものであるため、多少事実と違う部分があるかもしれない。今後の研究に注目すべき点である。

- (10) 市村高男「越相同盟の成立とその歴史的意義」(『戦国期東国社会論』吉川弘文館 一九九〇年)。
- (11) 山崎哲彦「上杉景虎について」(『関東中心戦国史論集』名著出版 一九八〇年)。
- (12) 池田嘉一『史伝上杉謙信』中村書店 一九七一年。
- (13) 景虎は越後にやって来る以前に、既に妻帯していたと思われる。木村氏などは、『続群書類従』に収録されている「北条系図」をもとに、一族北条幻庵の娘を妻とし、幻庵の婿養子となつたと云う。しかし彼が越後へ向かう際に離縁したという記事は見当たらないばかりか、景虎死亡後は生家に戻されたと云う記述が若干見受けられるため、彼は妻を伴つて越後入りした可能性が高い。当時側室を設け

ることは普通であったが、敢えて景勝の妹を輿入れさせたことに、謙信の期待と考えが透けて見えるような気もする。

- (14) 『川西町史』 通史編上巻 一九八七年 (山田邦明執筆分)。
- (15) 佐々権左衛門長穂と云う人は、織田信長の現地駐在員で、謙信と信長との連絡を請け負っていた人物である。天正二年、信長が謙信に「洛中洛外図」を贈った際に越後に赴いたと云われている。
- (16) 児玉彰三郎『上杉景勝』 児玉彰三郎遺著刊行会 一九七九年。
- (17) 須藤茂樹「甲越同盟の一考察」『史学研究集録』 十五号 一九九〇年。

その他参考文献

- ・ 東京大学史料編纂所 『大日本古文書 家わけ第十二ノ二 上杉家文書』 東京大学出版会 一九七一年。
- ・ 『新潟県史』 通史編2 新潟県 一九八七年。
- ・ 槇島昭武原著 霜川遠志訳 『関八州古戦録』 教育社 一九八一年。
- ・ 江西逸志子原著 岸正尚訳 『小田原北条記』 教育社 一九八〇年。
- ・ 渡辺慶一編 『上杉謙信のすべて』 新人物往来社 一九八七年。
- ・ 永岡慶之助 『戦国裏面史』 東京書籍 二〇〇〇年。
- ・ 池亨、矢田俊文編 『上杉氏年表』 高志書院 二〇〇三年。
- ・ 栗原修 「越後御館の乱と上野沼田地域―沼田在番衆河田重親の動向を中心に―」 (『武田氏研究十四号』 一九九五年)。
- ・ 吉成勇編 『戦国合戦「古記録・古文書」総覧』 新人物往来社 一九九九年。

御館の乱 略年表

年月	事柄
天正六年 三月	<p>〔頸城〕 十三日、謙信死亡。</p> <p>二十四日頃、景勝実城入り。</p> <p>〔国外〕 下旬、厩橋城主北条高広・景広(景勝方)に関東の情勢を報告させる。</p>
四月	<p>〔中郡〕 四〇五月にかけて、景虎方の本庄秀綱が直江信綱の居城与板周辺を攻める。景勝、赤田城将斉藤朝信に加勢を命じ、信綱家臣団とともにこれを撃退。</p> <p>〔揚北〕 二十日、本庄繁長が景勝に臣従。</p>
五月	<p>〔頸城〕 五日、大場で衝突。北条高定を成敗。</p> <p>十三日、景虎御館入り。</p> <p>十六日、東条佐渡守が春日山城下に放火。堀江宗親・桃井義孝ら御館入り。</p> <p>十七日、春日山を攻撃するも、撃退される。</p> <p>〔中郡〕 四月末〜五月頭にかけて、景虎方の本庄秀綱が景勝方の直江信綱の居城・与板城を攻める。</p> <p>上旬、神余親綱、景虎方として行動するようになる。</p> <p>下旬、景勝、坂戸城将深沢利重らに上越国境、妻有の小森沢政秀らに信越国境の警備体制を強化するよう命ずる。</p> <p>小森沢政秀、信濃飯山を攻める。</p> <p>〔揚北〕 上旬、色部長真の家臣が景虎方に応じ、本庄繁長がこれを鎮圧。</p>
六月	<p>〔頸城〕 上旬、景虎方の猿毛・旗持・直峰城を奪取。</p> <p>十一〜十三日、大場・居田の二方面から御館を攻撃。巢城ばかりにするものの、陥落ならず。</p> <p>〔中郡〕 小木城将板屋英胤が本庄秀綱より誘いを受ける。</p> <p>〔揚北〕 この頃、景虎方の諸将と連携して伊達氏や蘆名氏が越後に侵入する。</p> <p>〔国外〕 上旬、北条高広・景広父子、河田重親が景虎方につ</p>

天正七年 一月	<p>〈頸城〉越中から河田長親(景勝方)が駆けつける。</p>
七月	<p>く。これにより、景勝、深沢利重らに防戦体制を整えるよう命ずる。 景勝、武田勝頼と和睦。 〈頸城〉二十三日、米山寺・犀浜の百姓に景勝の朱印なき者の徴発に応じないよう命ずる。</p>
八月	<p>〈頸城〉武田勝頼の斡旋によって和議が成立するものの、すぐに破談。 〈中郡〉北条高広・河田重親らが上田に侵入。北魚沼の広瀬など各地でも戦鬪を展開。 上旬、黒瀧城将山岸氏らが景勝に助勢を要請するが、上田助勢のため、これに応えられず。 「荻(≡小木)之者共」、与板に敵対。</p>
九月	<p>〈頸城〉上旬、北条景広(景虎方)、旗持城を攻撃。 中旬、本庄秀綱御館入り。 〈中郡〉上旬、景虎、坂戸城を攻撃。 十二日頃、榊沢城などが景虎の手に落ちたと思われる。 下旬、援軍として武田軍が妻有に到着し、上田を窺う。</p>
十月	<p>〈頸城〉上旬、北条景広御館入り。 景勝、この頃より琵琶島城の攻略に乗り出す。 〈中郡〉九月末〜十月初めにかけて、榊沢城に詰めた兵のみを残し北条軍撤退。榊沢城には北条高広・河田重親が在城。 十日、景虎、河田重親に「城中普請番等」を堅固にするよう命ずる。 十二日、景勝、河田重親を懐柔しようとする。 十二月</p>

七月	<p>〈頸城〉下旬、景勝、春日山城に帰還。</p>
六月	<p>〈中郡〉六月十二日〜二十日、三条城落城。 二十二日、景勝、中郡に再出馬し、栃尾・三条両城の置きを行う。</p>
四月	<p>〈中郡〉景勝、地藏堂へ布陣し、栃尾城を攻撃。二十二日、栃尾城落城。</p>
天正八年 閏三月	<p>近の残党も一掃された。</p>
四月	<p>〈揚北〉黒川清実に占拠されていた鳥坂城を奪還。</p>
三月	<p>〈頸城〉十七日、御館落城。この前後、景虎・上杉憲政らが死亡したものとみられる。 〈中郡〉景勝、坂戸城将らに上越国境警備について命じる。 景虎自害以後、三島・古志における両軍の戦鬪が活発化。</p>
二月	<p>〈頸城〉一日、御館攻撃が激化。 三日、能登の鯨坂長実に御館攻撃への参加を命ずる。 中旬、景勝、鯨波小屋・上条城などの景虎方の砦や城を攻略。 十七日、島の壘を攻略。翌日、景勝、上野九兵衛尉を応化橋へ出陣させ、錦要害から御館へ通じる輸送路を遮断。御館完全に孤立。 二十六日、坂戸城将深沢利重らに御館攻撃への参加を命ずる。 〈中郡〉上旬、榊沢城から景勝方に寝返る者が出、二・三輪廻まで焼き払われ、巢城のみとなる。 その後、榊沢城落城。 二十三日、景勝、深沢利重に荒戸・直路の防備強化と御館攻撃への参陣を命ずる。 〈国外〉蘆名氏、景勝に修好を求める。</p>